

作成日	2025 年 6 月 16 日
研究科名	生活環境学専攻

自己評価：S・**A**・B・C

評価項目① 過年度からの改善・向上の取り組み

- (ア) 昨年度の自己点検・評価において各組織で記述した課題・改善方策や、内部質保証推進会議からの提言を踏まえ、現時点における取り組み状況・成果について記載してください。
- (イ) 課程修了時に求められる学習成果の達成のために適切な指導・支援・フィードバック等を行い、それによって学生が意欲的に学習できているか。学生への指導や支援、成績評価やフィードバック等の取組状況を具体的に説明してください。また、期待した効果が得られているか、各種アンケート結果等をもとに検証のうえ、記載してください。

参照資料

- ・令和6年度自己点検評価シート
- ・令和6年度内部質保証推進会議からの提言
- ・第二期中期計画およびR7学長方針
- ・大学院生アンケート
- ・卒業時アンケート（大学院）
- ・資格取得や進路就職状況
- ・各種会議の議事録等

【現状分析】

(ア) 令和6年度における自己点検・評価では以下の3点が挙げられている。

(1) 「生活環境学専攻の特徴や利点が、印象に残る資料によってまだまだ志願者に十分に伝わっていないと思われる。これが志願者数にばらつきが出る主な原因と考えられる。」について、HPにおいて食物栄養学専攻、生活造形学専攻において動画でも解説を行なっている。いずれも在学生のメッセージも伝えている。

(2) 「教員の若返りはさらに進めていかなければならない。また男女比についても偏りがある。」について、新たに1名博士後期課程指導教員のプロモートが認められたが、50代男性であり、昨年度と状況は変わらない。

(3) 「少人数制であるため、異分野の多くの学生と意見交換する共通の場がまだ少ないと感じられる。より多くの機会を設けるために、独自の工夫をする必要がある。」については学会発表や様々な分野の学生が集まるD論発表会おいての交流が可能である。

(イ) 生活環境学専攻では、教育研究上の目的に明示する知識・理解だけではなく、実践的な技能・表現、豊かな人間性、総合的なコミュニケーション力を涵養するために様々な工夫をしている。まず、少人数教育を生かしたS/T比の非常に低い対面授業を基本とし、状況に応じてICTを活用した遠隔授業を提供している。対面と遠隔を同時に使うこともできる柔軟な態勢を整えている。

卒業時アンケートにおいて全体の満足度は4であった。特に評価が5と高かったのは「たくさんの先輩・後輩・友人と出会える」「奨学金制度や学費支援制度」「食堂やトイレなどの生活施設」「留学の支援・制度」である。また、「幅広い知識教養が身につけられる授業の多さ」「専門的な

知識が身に付く授業の多さ」「語学力が向上する授業・制度」なども評価が4と高かった。逆に評価が3であったものとして、「将来のキャリアについて考える機会の多さ」「教授との距離の近さ」などがあるが、アンケートに回答している学生数も非常に少なく、学生自体の環境（社会人であるなど）により大きく変わる項目であると考えられる。

適切な指導・フィードバックについては、2024学修行動比較調査（大学院全体）において、受けた授業の成績評価が「適正=63.8%」、「自己評価より評価が高い=4.25%」、「わからない=4.25%」「無回答=27.7%」であり、不適正という回答はなく、概ね良好といえる。

【成果】

本学の様々な支援・制度に対し、高い評価が示されている。またカリキュラム内容に対しても評価が高い。

【課題】

教員の年齢比、男女比については偏りのある状態であり、多様性の観点から課題となっている。

【改善・発展方策】

学生への指導、支援について引き続き細やかな対応を行っていく。教員構成について現状では改善は難しいが、今後採用の機会があれば年齢、男女比を考慮した採用を考える。